

“過”の不連続性について

劉 綺 紋

1. はじめに
2. Smith (1997) の〈不連続性〉について
3. 事象アスペクトとの関係
 - 3.1. 〈広義の結果状態〉と〈狭義の結果状態〉
 - 3.2. 〈必然的終結点〉と〈変化〉
4. 発話の前景・背景との関係
 - 4.1. 永久的結果状態について
 - 4.2. 一時的結果状態について
5. その他の認知的要因との関係
 - 5.1. “結過婚”と“離過婚”との相違
 - 5.2. 再び“結過婚”について
 - 5.3. “認識過”について
6. おわりに

1. はじめに

本稿の目的は、Smith (1997) が提起した中国語のアスペクト助詞“過” [guo] の〈不連続性〉について再検討することである。この“過”の〈不連続性〉についての Smith (1997) の説明及びその問題点については、第 2 節で述べることとし、まずこの第 1 節では、“過”についての先行研究及び本稿の考え方を簡単に述べておきたい。

アスペクト助詞“過” [guo] は、〈完了〉の意味も〈経験〉の意味も表すこと

ができる。例えば、次の(1)(2)がそうである。

(1) 〈完了〉：我剛才吃過午飯。(私はさっき昼ご飯を食べた。)

(2) 〈経験〉：我吃過魚翅。(私はフカヒレを食べたことがある。)

そこで、先行研究の多くは、〈完了〉を表す“過”と〈経験〉を表す“過”とを2つの異なったマーカーとして分け、それぞれ“過₁”“過₂”などと呼んで両者を区別している。また、多くの先行研究は、“過”の表す意味や“了”・“已經”などとの統語上の共起関係などによって、“過₁”と“過₂”との相違を明らかにしようと努めてきた(例えば孔令达 1986, 刘月华 1989, 吕叔湘 1999 など)。しかし、未だに両者の相違は明確に区別されていない¹⁾。

以上のような先行研究とは対照的に、Smith (1997) は、“過”を1つのマーカーとして統一的に説明しようと試みた。すなわち、Smith (1997) は、“過”のテンス的意味・アスペクト的意味、“過”が文の事象アスペクト²⁾に与える影響などを分析した結果、“過”を含む文は〈パーフェクト構文(完了構文 Perfect construction)〉の本質を持つことを明らかにした。そして、パーフェクトのもとで〈完了〉の意味も〈経験〉の意味も表しうるとしている (p.269)。

この Smith (1997) を踏まえ、劉綺紋 (2000; 2002; 2004b) は“過”のタクシス (taxis) 的意味³⁾やパーフェクトのタイプについて考察した。そして、“過”の主な機能が〈出来事パーフェクト(すなわち工藤 (1995) の言う「動作パーフェクト (actional perfect)」)〉であることを明らかにした。

さらに、劉綺紋 (2004b; 2004c) では、“過”と中国語のもう1つのアスペクト助詞“了” [le] との比較を通して、次の2点を明らかにした。まず1点目は、“過”が多くの場合においてパーフェクト (perfect) のテンス的意味と完結相 (perfective) のアスペクト的意味とを同時に持つ理由である。つまり、“過”が出来事パーフェクトとして機能する理由である。それは、“過”の主なアスペクト操作が〈終結点通過〉だからである。すなわち、“過”は何らかの事象と結び付いた場合、その事象がいくつの局面を持つかにかかわらず、その事象における最終局面の終結点を通り過ぎている、という操作を行うの

である。

次に2点目は、“過”がパーフェクトのテンス的意味を持たず、完結相のアスペクト機能のみを担う場合、すなわち〈終結点到達〉の操作を行う場合は、構文と事象アスペクトという2つの制約を受けるという点である。この点について、次の例文(3)(4)を見てみる。

(3) 他吃過飯, (刷過牙, 刮過鬍子,) 然後洗{*過/了}臉。(彼はご飯を食べ、(歯を磨き、ひげを剃り,) それから顔を洗った。)

(4) a. 她有{?過/了}孩子, 就結婚了。(彼女は子供ができた。それで結婚した。)

b. 他們一行人到{?過/了}臺北, 去了故宮博物院。(彼ら一行は台北に着いた。故宮博物院に行った。)

(3)(4)は、いずれも複数の継起的事象を述べる文である。これらの文によって、“過”の完結相機能の制約をテストすることができる⁴⁾。まず(3)は、完結相の“過”についての構文の制約を示している。この文では、最終事象を“過”で述べると非文となる。それは、“過”が完結相(perfective)として機能できるのは、継起的事象を表す構文における先行諸事象に限られるからである。

また(4)は、完結相の“過”の事象アスペクトの制約を示している。この2つの文では、“過”で述べると継起性を表さなくなる。それは、“過”が完結相として機能できるのは、動的局面のみを持つ事象と結び付いた場合に限られるからである。一方、(4a)の“有孩子”(子供がいる)は静的局面だけを持つ事象(静的事象)であり、(4b)の“到臺北”(台北に到着する)は動的局面の後に静的局面がある事象(結果状態が生じる事象)だからである。

以上のように、“過”を2つのマーカーとして分けていた先行研究とは異なり、劉綺紋(2000; 2002; 2004b; 2004c)はSmith(1997)を踏まえた上で、“過”を1つのマーカーとして統一的に説明することを試みた。その結果、どのような場合に“過”が出来事パーフェクト(actional perfect)を担うか、どのよ

うな場合に“過”が完結相 (perfective) を担うか、ということ を明らかにした。但し、まだ未解決の問題がさしあたり2点ある。

その1点目は、“過”における出来事パーフェクト機能と完結相機能との関係についてである。この点は本稿の主題ではないため、筆者の考え方については次のように簡単に述べるにとどめておく。まず、出来事パーフェクト (actional perfect) は、アスペクト助詞“過”の典型的な時間的機能である。そして、アスペクト助詞“過”が出来事パーフェクトの機能を担う場合、〈終結点通過〉のアスペクト操作を行う。それは、「通り過ぎる」「通過する」の意味を表す動詞の“過” [guò] が、空間領域からアスペクト領域へと拡張された結果である⁵⁾。一方、完結相 (perfective) は、出来事パーフェクトからの拡張機能であり、“過”が完結相を担う場合は、終結点を通過せずに終結点に到達する操作、すなわち〈終結点到達〉のアスペクト操作を行う。それは、〈終結点通過〉のアスペクト操作を行う“過”は、構文などの要因により、テンスの意味が取り消されるからである。

また、2点目の問題点は、Smith (1997) が提起した“過”の〈不連続性〉についてである。本稿の主題は、この〈不連続性〉を再検討することである。そこで次節では、この点に関する Smith (1997) の説明及びその問題点について述べる。

2. Smith (1997) の〈不連続性〉について

アスペクト助詞のうち、“過”と“了”とは共に完結相 (perfective) というアスペクト機能を持ちながら、次のような相違がある。

- (5) a. 他們上個月去過香港。(彼らは先月香港に行った(が、現在はもう香港にいない)。
b. 他們上個月去了香港。(彼らは先月香港に行った(が、今でもまだ香港に

いるかもしれない)。

“了”とのこのような相違は，“過”の顕著な特徴の1つであり，殆どの“過”に関する論述が言及している。そして，この“過”の特徴を，Smith (1997)では〈不連続性 (discontinuity)〉と呼んでおり，(6)のように定義している。

(6) 視点アスペクト⁶ “過”は，現在やその他の参照時に対して不連続性を表す。不連続性は，テンス的でもあり，事象アスペクト的でもある。すなわち，現在や他の参照時において，その一時的な結果状態がすでに保たれていないことである (Smith 1997: 266)。

すなわち，Smith (1997)は“過”の不連続性を，〈参照時と一時的な結果状態とが連続しない性質〉であるとしている。また，“過”の不連続性が作用する場合と作用しない場合があることについて，Smith (1997)はこの問題を事象アスペクトとの関係において論じている。すなわち，一時的な結果状態 (transitory result state) が生じる〈終結的事象 (telic situation)〉を用いる場合 (例えば(7))，“過”の不連続性が作用するとする。それに対し，永久的な結果状態が生じる〈終結的事象 (telic situation)〉を用いる場合 (例えば(8))，または〈非終結的事象 (atelic situation)〉を用いる場合 (例えば(9))は，“過”の不連続性が作用しないとしている。(例文(7)~(9)は Smith (1997: 267)による。但し日本語訳・下線は引用者による。)

(7) 我摔斷過腿。(私は足の骨を折ったことがある (が，もう治っている。))

(8) 我看過那本書。(私はその本を読んだことがある。)

(9) 李四打過網球。(李四はテニスをしたことがある。)

しかし，次の例文(10)を見れば，Smith (1997)の規定では“過”の不連続性を十分に説明できないことに気付く。

(10) ?張三病死過。(張三は病死したことがある。)

ここでは，(10)を(8)と較べてみる。前述のように，Smith (1997)では，(8)の“看那本書”が永久的な結果状態が生じる終結的事象とし，この場合

には“過”の不連続性が作用しないとしている。しかし、(10)の“病死”も永久的な結果状態（死んでいる状態）が生じる終結的事象であるが、この場合には“過”の不連続性が作用する。それは、この文が不自然な文となっていることから分かる。どういうことかということ、死んでいる状態が終わらない状態であるのに対し、“過”の不連続性は、参照時まで結果状態が終わらなければならない性質だからである。“過”の不連続性が作用しているからこそ、この文は不自然になるのである。

ということは、Smith (1997) は、永久的な結果状態が生じる事象を用いる場合は不連続性が作用しないと言うが、必ずしもそうとは限らないのである。実は、この場合においても“過”の不連続性が作用することがあるからこそ、“過”は「不可逆的事態」と結び付かないと一般に言われているのである。

しかし実は、話はさらに複雑である。「死んでいる状態」が生じる事象を用いる場合でも、“過”の不連続性が作用せず、“過”で述べることができる場合がある。例えば、次の例文がそうである。

(11) 王五殺死過一個人。(王五は一人の人を殺して死なせたことがある。)

では、“過”の不連続性は、一体どのような場合に作用し、またどのような場合に作用しないのだろうか。本稿は、まず(8)(10)に相違が生じる原因を考える。それにより、Smith (1997) で論じていた、“過”の不連続性と事象アспектとの関係について再検討し、修正を行う。さらに、(10)(11)に相違が生じる原因を考える。それにより、Smith (1997) では言及していなかった、“過”の不連続性と認知的な要因との関係についても考察する。以上の考察を通して、“過”の不連続性を明らかにしたい。

3. 事象アスペクトとの関係

3.1. 〈広義の結果状態〉と〈狭義の結果状態〉

第3節では、“過”の不連続性と事象アスペクトとの関係について考察する。まず、前掲の(8)(10)において相違が生じる原因を考えたい。

(8)も(10)も永久的結果状態が生じる事象を用いているのに、“過”の不連続性との関係を異にしている。その原因は何だろうか。

それは、結果状態には2種類のものがあり、不連続性が作用しないものと作用するものがあるからである（劉綺紋 2004b）。では、この2種類の結果状態は、それぞれどのようなものなのだろうか。この点について、前掲の(5a)で考えてみよう。

“他們去香港”（彼らが香港に行く）という事象が完結すると、いろいろな結果が生じると考えられる。まず、彼らが香港に行ったら（到着したら）必然的に生じる、直接的でしかも顕在的な結果は、「彼らが香港にいる」という結果である。この結果は、「彼らが香港に行く」という先行事象とは緊密な因果関係を持っている。本稿では、この結果を〈狭義の結果〉と呼び、この結果が存在している状態を〈狭義の結果状態〉と呼ぶ。

また、この〈狭義の結果〉以外に、例えば「彼らが香港の町をある程度知っている」、「広東料理が好きになっている」、「彼らが香港式の金儲けの方法を知っている」などといったような結果も生じるかもしれない。このような結果は多種多様で、「彼らが香港に行く」という先行事象と何らかの因果関係を持っているものから、因果関係と称せないほどのものまで、実にさまざまである。本稿では、このような影響・作用・痕跡・効果・効力などというように、より潜在的で間接的で非必然的な結果を〈広義の結果〉と呼び、この結

果が存在している状態を〈広義の結果状態〉と呼ぶ。

それでは、“過”の不連続性により、参照時までには終わっていなければならないという〈結果状態〉は、どのような結果状態なのだろうか。

(5a)に見られるように、“過”で述べると、彼らはすでに香港にいない。すなわち、現在において〈狭義の結果状態〉は存在していない。しかし、何らかの〈広義の結果状態〉(例えば「彼らが香港の町をある程度知っている」など)は、現在においても存在する。

この点について、さらに(12)を見てみる。

(12) “……出洋好比出痘子，出痧子，非出不可。小孩子出過痧痘，就可以安全長大，以後碰見這兩種毛病，不怕傳染。我們出過洋，也算了了一樁心願，靈魂健全，見了博士碩士們這些微生物，有抵抗力來自衛。……。”(《圍城》81) (「……海外に出るのは疱瘡が出たり，麻疹が出たりするようなもので，一度は出なければいけない。子供に麻疹や疱瘡が出たことがあるなら，もう安全に成長でき，以後この二つの病気にぶつかっても，うつる心配がない。ぼくらが海外に出たことがあれば，念願を叶えたと言える。それで健全な精神を育てて，博士とか修士とかいう微生物どもに出くわした時に，自衛できる抵抗力を持てるんだ。……」)

この例文に見られるように，“出痧痘”を“過”で述べると，「麻疹や疱瘡が出ている状態」(狭義の結果状態)はすでに終結している。一方，「(子供が)安全に成長でき，以後麻疹や疱瘡がうつる心配がない状態」という免疫力(広義の結果状態)は現在においても存在している。また，“出洋”を“過”で述べると，「海外にいる状態」(狭義の結果状態)はすでに終結している。一方，「健全な精神を育てて，博士や修士に出くわした時に，自衛できる抵抗力を持てる」という一種の免疫力・抵抗力(広義の結果状態)は現在においても存在している。

以上の例からも，“過”の不連続性により，参照時までには終わっていなければならない〈結果状態〉とは，〈狭義の結果状態〉の方であり，〈広義の結果

状態)の方ではない、ということが分かる。

このことから、(8)と(10)とが“過”の不連続性との関係を異にしている原因も分かるだろう。それは、(8)の“看那本書”の永久的な結果状態が〈広義の結果状態〉であるのに対し、(10)の“病死”の永久的な結果状態は〈狭義の結果状態〉だからである。

実際、誰かが病死したら、その人は必然的に「死んでいる」ことになる。すなわち、〈狭義の結果状態〉が生じるのである。一方、〈狭義の結果状態〉は、“過”の不連続性の作用で参照時までには終わっていないなければならない。そこで、その〈狭義の結果状態〉が、永久的に存続して終わることができないものであれば、(10)のように“過”で述べると不自然な文になるのである。

それに対し、一冊の本を読んだら、「勉強になっている」や「眠くなっている」などといった影響や効果は生じるだろうが、それらは必然的なものではなく、〈広義の結果状態〉にすぎないのである。そして、〈広義の結果状態〉は、“過”の不連続性の作用で参照時までには終わっていないなければならない、ということはない。そこで、その〈広義の結果状態〉が永久的に存続していても、(8)のように“過”で述べるのできるのである。

以上の分析から、〈広義の結果状態〉と〈狭義の結果状態〉とを分けていない Smith (1997) の観察が不十分なことは明らかだろう。“過”の不連続性を考えるに際してまず重要なのは、その結果状態が広義のものであるか狭義のものであるかということであり、その結果状態が「狭義のもの」でなければ、“過”の不連続性はもとより作用しない。ということは、“過”の不連続性における〈不連続〉は、Smith (1997) の言う〈参照時と一時的結果状態とが連続しない〉というよりも、むしろ〈参照時と狭義の結果状態とが連続しない〉とすべきなのである。

3.2. 〈必然的終結点〉と〈変化〉

次に、〈狭義の結果状態〉と事象アスペクトとの関係について考える。以下、〈狭義の結果状態〉を〈結果状態〉と略称し、そのうちの〈永久的な狭義の結果状態〉を〈永久的結果状態〉と略称し、〈一時的な狭義の結果状態〉を〈一時的結果状態〉と略称し、論を進めていく。

前節の分析から明らかのように、“看那本書”も“病死”も同様に〈終結的事象 (telic situation)〉でありながらも、〈結果状態〉が生じるかどうかという点で異なっている。このことは、いわゆる〈終結的事象〉は実はさらに2つのタイプに分ける必要があることを示唆している。この点について、日本語の事象アスペクトに関する森山(1988)の考察を見てみよう。

Vendler(1967)で分類した State (静的事象), Activity (活動型事象), Accomplishment (達成型事象), Achievement (点的事象) という4つのタイプの事象のうち、達成型事象と点的事象とは共に〈終結的事象 (telic situation)〉である。にもかかわらず、日本語のテイル形との関係は2通りある。例えば、「殺す」(達成型事象)、「死ぬ」(点的事象)などの事象をテイル形にする場合は、「殺されている」、「死んでいる」のように、〈結果状態〉の解釈ができる。それに対し、「『鼻』を読む」(達成型事象)、「一瞥する」(点的事象)などの事象をテイル形にする場合、「『鼻』を読んでいる」、「一瞥している」のように、〈結果状態〉の解釈はできない。そこで森山(1988)では、〈終結的事象〉、すなわち〈必然的終結点〉が内在する事象を2種類に再分類している。そのうち、テイル形にすると結果状態の解釈ができるタイプを〈変化〉が起きるタイプとし、テイル形にすると結果状態の解釈ができないタイプを〈変化〉が起きないタイプとしている。

劉綺紋(2004b)は、この考察にヒントを得て、中国語の“過”の不連続性と事象アスペクトとの関係を考える際には、その事象が〈変化性〉であるか

〈不変性〉であるかということが最も重要であると考えた。そもそも、事象が、終結的 (telic) であれ、非終結的 (atelic) であれ、また変化性であれ、不変性であれ、いかなる事象でも完結した後に何らかの結果を生じる。その結果は、必然的であれ非必然的であれ、直接的であれ間接的であれ、また顕在的であれ潜在的であれ、ともかく何らかの結果である。しかし、〈結果状態〉すなわち〈狭義の結果状態〉が生じるのは、〈変化性の事象〉すなわち〈変化性の終結的事象〉に限られているのである。そこで劉綺紋 (2004b) では、〈終結的事象〉をさらに〈変化性の終結的事象〉と〈不変性の終結的事象〉とに分けた⁷⁾。

“過”の不連続性が作用するのは、〈変化性の終結的事象〉のみに対してである。一方、〈不変性〉の事象であれば、たとえそれが〈終結的事象〉であっても、“過”の不連続性は作用しないのである。それは、〈活動型事象〉(非終結的事象 atelic situation) の〈不変性〉の事象に対して“過”の不連続性が作用しないのと同様である。

前述のように、(10)の“病死”と(8)の“看那本書”とで“過”の不連続性との関係を異にする。それは、両者が〈狭義の結果状態〉が生じるかどうかという点で異なっているからである。すなわち、前者は〈変化性の終結的事象〉であるのに対し、後者は〈不変性の終結的事象〉だからである。

Vendler (1967) が Achievement としたタイプを、Smith (1997) は2種類に再分類し、“reach the top”などの結果状態が生じるタイプについて Achievement という用語をそのまま援用しているのに対し、“knock at the door”などの結果状態が生じないタイプについて Semelfactive という用語で呼んでいる (Smith 1997: 29-31)。しかし Vendler (1967) で Accomplishment としたタイプについては、Smith (1997) は同様な再分類を行っておらず、1種類のままとしている。これが、(8)と(10)の相違を Smith (1997) の考え方によって説明できない理由である⁸⁾。

以上、“過”の不連続性と事象アスペクトとの関係を検討した。しかし、

“過”の不連続性は事象アスペクトによって説明できない場合もある。以下の第4節と第5節では、この点について考える。

4. 発話の前景・背景との関係

4.1. 永久的結果状態について

前述のように、結果状態が永久的である場合、参照時においてもその結果状態が存在しているため、“過”の不連続性と抵触してしまい、“過”と結び付くことができない。

しかし実は、事情はもう少し複雑である。この点について、次の例文を見よう。

(13) a. ?張三死過。(？張三は死んだことがある。)

b. 姑乙 [又想起一段] “奇怪,周家有這麼好的房子,爲什麼要賣給醫院呢?”

姑甲 [沈靜地] “不大清楚。——聽說這屋子有一天夜裏連男帶女死過三個人。”(《雷雨》635)

シスター乙 [何か思いだして] 「しかし変だわね,周家の家はこんなに立派なのに,なんで病院に売ったの?」

シスター甲 [穏やかに] 「よく分からないが,この家で,ある晩男女3人が亡くなったそうだけど」

(14) a. 王五殺死過一個人。(王五は1人の人を殺して死なせたことがある。)

b. ?朱七被殺死過。(？朱七は殺されたことがある。)

“死”も“殺死”も「(誰かが)死んでいる」という永久的結果状態が生じる事象である。しかし,(13a)と(14b)は“過”で述べると不自然な文となるのに対し,(13b)と(14a)(=11)は“過”で述べても自然な文である。それ

は、なぜだろうか。それは、その結果状態の主体が発話の前景に置かれているか、それとも背景に置かれているか、ということと関係している。

まず、(13a)と(14a)とを比較してみる。(13a)において「死んでいる主体」(張三)は主語となっており、発話の前景に置かれている。それに対し(14a)においては、「死んでいる主体」(1人の人)は目的語となっており、発話の背景に置かれている。(14a)において、主語となって発話の前景に置かれているのは、動作の仕手(王五)である。

では、(14b)の“殺死”を“過”で述べると不自然になる理由は何だろうか。それは、(14b)においては受動態にすることにより、動作の受け手(朱七)が前景になっているからである。また、次の(15)において、原文の“給槍斃了”を“給槍斃過”に置き換えることができないのも同様な理由による。この文の“給”は“被”と同様に、受動態のマーカーとして機能しているのである。

- (15) “就那這幾個人來說：邵子奇、賈宜生、陸沖、你、我，還有我們那位給槍斃了{了/?過}的日本大漢奸陳雄——當年我們幾個人在北大，一起說過些什麼話？”（《臺北人》〈冬夜〉47）（「今話しに出てきた仲間（タマゴ）はみんな……，邵子奇，賈宜生，陸沖，君，僕，それに日本の大漢奸として銃殺された陳雄もいた——あの頃我々は北京大学で，一緒に何を話していたのだろう」（松永正義訳『彩鳳の夢』「冬の夜」34）

また、前掲(13b)の“死過”が自然に言えるのは、この文が、場所（この家）を前景に置く存現文だからであり、死んでいる主体（男女3人）が発話の背景に置かれているからである。

多くの先行研究では、永久的結果状態（あるいは不可逆的な結果状態）が生じる事象は“過”と結び付くことができない、ということしか述べていない（例えば劉月華1989: 313など）。しかしそれだけでは不十分であろう。その永久的結果状態の主体が発話の背景にある場合には、“過”の不連続性が作用せず、“過”と結び付くことができるのである⁹⁾。

4.2. 一時的結果状態について

以上、“過”の不連続性と発話の前景・背景との関係について、永久的結果状態を通して考えた。もちろん、その結果状態が一時的な場合にも同様なことが言える。この点について、まず前掲の(5a)と次の(17)とを較べてみる。

(16) 張三：“你會不會做糖醋蹄子？”（「豚足の甘酢煮作れる？」）

李四：“下午我才燉過一大鍋呢！”（「午後に大鍋で豚足の甘酢煮を作ったばかりだよ」）

(5a)の“去香港”の結果状態は「香港にいる状態」であり、(16)の“燉一大鍋糖醋蹄子”の結果状態は「一鍋の大鍋の豚足の甘酢煮」であり、共に一時的結果状態である。しかし(5a)では、参照時においては彼らがすでに香港にいないことを表している。それに対し、(16)では、参照時（発話時）においても豚足の甘酢煮は残っているかもしれない。つまり、(5a)では“過”の不連続性が作用するのに対し、(16)では“過”の不連続性が作用しないのである。その原因はやはり、(5a)の結果状態の主体（彼ら）が発話の前景にあるのに対し、(16)の結果状態の主体（豚足の甘酢煮）が発話の背景にあるからである。

では、次の例文はどうだろうか。

(17) 張三：“那件衣服怎麼樣？看來挺適合你的。”（「あの服はどう？あなたに似合いそうだけど」）

李四：“那件衣服我穿過了，不太合適。”（「あの服は着たんだが、あまり似合わなかった」）

この場合、発話時において、李四がすでにその服を身につけていないことを表しており、つまり、“過”の不連続性が作用しているのである。このことは、前述のこととは一見矛盾するかのように見える。なぜなら、(17)は

(16)と同様に、結果状態の主体（その服）が背景にあるからである。

しかし、“穿衣服”が再帰的事象であることを考えれば、(17)において不連続性が作用することは説明が付く。再帰的事象は、動作の受け手が動作の仕手の一部や所有となり、受け手に対する行為の働きかけが受け手に状態変化を引き起こし、それと同時に、その状態変化が仕手に帰ってくる、という性質を持つ事象である（森山1988を参照）。すなわち、(17)において、背景に置かれている動作の受け手（その服）だけではなく、前景に置かれている動作の仕手（李四）にも結果状態を生じさせているからである。また、Smith (1997)では、前掲の例文(7)が用いられた場合、発話時において足の骨折はすでに治っていることを表すとしている（p.267）。それも、“我摔断腿”が再帰的事象だからであると考えられる。

以上、“過”の不連続性と発話の前景・背景との関係を分析した。この分析から、“過”の不連続性は、事象アспектだけではなく、認知的要因とも緊密に関係していることが推測できる。次節では、さらにその他の認知的要因を見てみる。

5. その他の認知的要因との関係

5.1. “結過婚”と“離過婚”との相違

第5節では、同様に結果状態が生じる事象で、かつその結果状態の主体が同様に発話の前景にある場合でも、“過”との関係が異なる場合があることについて検討する。ここではまず、“結過婚”と“離過婚”との相違について考えたい。

“結婚”も“離婚”もどちらも〈変化性の点的事象〉である。すなわち、どちらも瞬間的に成立するとともに状態変化が起き、それで結果状態（結婚し

ている状態・離婚している状態)が生じるはずである。しかし、“結過婚”と“離過婚”が表す状況はふつう異なっている。この点について、(18)(19)で確認しよう。

(18) “……怎麼說呢？小福子既是，像你剛才告訴我的，嫁過人，就不容易再有人要；人家買姨太太的要整貨。……”（《駱駝祥子》212）（「……どうしてだって。その女は、お前さんも今言ったように、一度お興入れをしたことがあるんだろう。そんな中古は、誰だっておいそれとは手を出さんよ。お妾さんをもらうにしても生娘のほうがいいんだからな。……」（中山高志訳『駱駝祥子』350）

(19) （白流蘇：）“離過婚了，又去做他的寡婦，讓人家笑掉了牙齒！”（《傾城之戀》〈傾城之戀〉189）（「離婚したのに未亡人役をつとめに行くなんて、いい物笑いの種ね」（池上貞子訳『傾城の恋』「傾城の恋」159）

(18)の“(小福子)嫁過人”は、“結過婚”と同様な意味を表しており、小福子が一旦結婚していたし、かつその婚姻状態がすでに終わっている、ということを表している。一方(19)の“(白流蘇)離過婚”では、白流蘇は離婚したが、しかしその離婚後の独身生活が終わっていることまでは表していない。実際、この物語において、この時点では話し手の独身生活はまだ続いているのである。このように、“結婚”に対して“過”の不連続性が作用するのに対し、“離婚”に対しては“過”の不連続性が作用しない¹⁰⁾。では、“結過婚”と“離過婚”とのこのような相違は、何に由来するものなのだろうか。

それは、認知によるものだと考えられる。「結婚」も「離婚」もどちらも〈変化性の点的事象〉であるため、理論的にはどちらも〈変化〉と〈結果状態〉という2つの意味成分を持っているはずであるが、しかし、言語使用者の私たちはそのように認知していない。ふつう、結婚と言う場合、婚姻関係を結んだことと婚姻生活を営んでいることとの両方を指しているのに対し、離婚と言う場合は、婚姻関係を解消したことしか指しておらず、離婚後の生活を営

んでいることまでは指していない。つまり、「結婚」は〈変化〉（独身状態→婚姻状態）と〈結果状態〉（婚姻状態）からなるのに対し、「離婚」は〈変化〉（婚姻状態→独身状態）だけからなる、と私たちは認知しているのである。このような認知の相違により、“結過婚”と“離過婚”とで“過”の不連続性との関係が異なっているのである。

5.2. 再び“結過婚”について

では、次の2つの例文はどうだろうか。

(20) a. 代理孕母の資格要滿 20 歲到 40 歲, 必須結過婚。(代理母の資格は滿 20 歲から滿 40 歲までで, 結婚經驗を持っていなければならない。)

b. (戈珊:) “……我告訴你吧, 昨天不錯, 是有人在這屋裏! 就是今天來的那小王。他是結過婚的, 他女人在新聞出版處做事, 兩人一個住在男宿舍裏, 一個住在女宿舍裏, 所以沒辦法, 跟我商量, 借我這地方會面。”

“哦,” 劉荃微笑著說: “這也不是什麼違法的事, 人家是正式的夫婦。幹嗎要你這樣替他們守祕密!” (《赤地之戀》155)

(戈珊,) 「……教えてやろうか。昨日は確かに、この部屋に人がいた。今日来たあの王君だ。彼は結婚したが、彼の女房は新聞出版社で仕事している。彼は男性寮に住んで、彼の女房は女性寮に住んでる。仕方がないから、私と相談して、私の部屋を借りて会ってるんだ」

「そうなんですか、」劉荃は笑みを浮かべながら、「別に違法なわけでもないのに、正式な夫婦なんですよ。なんでそんなに秘密を守ってあげてるの!」

(20a)の“結過婚”は、代理母の資格を満たすためには一度結婚しなければならないことを表しており、現在において婚姻状態が終結していなければならないことを表しているわけではない。また(20b)の“他是結過婚的”は、

「彼が既婚者」であることを表している。ということは、この2つの例文においては、“結婚”に対して“過”の不連続性が作用しないのである。それは、なぜだろうか。

それは、これらの文脈において、「結婚している結果状態」が問題とされないからである。換言すれば、「結婚」という事象が、これらの文脈によって〈変化〉(独身状態→婚姻状態)という1つの局面だけに焦点化されているからである。

前掲(18)とこの(20)との相違から分かるように、同じ事象を用いつつも、文脈の要因によって、その事象における特定の局面が焦点化されることがあり、そこで“過”の不連続性が作用したり作用しなかったりすることがあるのである。

5.3. “認識過”について

この5.3節では、引き続き“過”の不連続性に影響しうる認知的要因について考える。

“認識”や“知道”などの認知の意味を示す事象を“過”で述べることができるかどうかという点、一般に容認度が低いとされている(刘月华ほか2001: 402参照)。例えば、(21)はふつう言わないだろう。

(21) ?我認識過他。(?私は彼と知り合いになったことがある。)

しかし、次の例文はどうだろうか。

(22) 我認識過火星。 (私は火星人と知り合いになったことがある。)

同様に“認識”を用いながらも、(21)に較べ、(22)の許容度はかなり高くなる。その原因は、何だろうか。

それは、たとえ火星人と一旦知り合いになったとしても、ふつう火星人を永久に自分の知り合いとして考えないからである。言い換えれば、「火星人と知り合いになっている」という結果状態は、ふつう一時的なものと考えら

れるからである。一方、(21)が言いにくい原因は、“他”(彼)という代名詞を用いているからである。代名詞を使っている場合、その人を自分の知り合いとして考えている場合が多い。言い換えれば、「彼と知り合いになっている」という結果状態は、永久的なものと通常考えられているからである。

但し、この(21)でさえも、適切な文脈に置かれれば、許容量が高くなるだろう。例えば、談話内に現れるある人とは、現在では見知らぬ人ではあるが、かつて実は知り合いだったことをふと思い出した際、(21)は使いやすくなる。例えば、次のような状況がそうである。

(23) (張三は今日の新聞を李四に見せながら)

張三：“你看你看，這個案子的犯人抓到了！”（「ほら、この事件の犯人が捕まったよ」）

李四：“啊！這個人就是殺人犯？我認識過他，以前打工的時候，可能還講過一次話。”（「えっ、この人が殺人犯？私はこの人と知り合ったことがあるよ。以前アルバイトしていた時に、一度は話したこともあるかもしれない」）

以上のことから分かるように、“認識”などの認知的意味を示す事象がふつう“過”と結び付かないのは、その主体の結果状態が永久的だと通常は考えられるからである。しかし、対象や文脈などの要因により、その主体の結果状態が一時的だと考えられることもある。この場合は、“過”と結び付くことができるようになるのである。

6. おわりに

Smith (1997) が提起した不連続性は、“過”の重要な意味論的特徴である。そして Smith (1997) は、この“過”の不連続性を、〈参照時と一時的な結果状態とが連続しない性質〉であるとしていた。また、一時的結果状態が生じ

る〈終結的事象 (telic situation)〉を用いる場合には、“過”の不連続性が作用するのに対し、永久的結果状態が生じる〈終結的事象〉を用いる場合または〈非終結的事象 (atelic situation)〉を用いる場合には、“過”の不連続性が作用しないとしていた。

しかし、Smith (1997) の記述だけでは、“過”の不連続性を十分に説明することができない。そこで本稿は Smith (1997) を踏まえた上で、“過”の不連続性について考察した。その結果、次の2点のことが明らかになった。

まず1点目は、“過”の不連続性と事象アスペクトとの関係に関する Smith (1997) の記述は、次のように修正する必要があるということである。すなわち、変化性の事象、すなわち〈変化性の終結的事象〉を用いる場合に限り、“過”の不連続性が作用する。それは、変化性の事象のみに、結果状態 (すなわち狭義の結果状態) が生じるからである。一方、不変化性の事象であれば、それは〈不変化性の終結的事象〉にしる、〈非終結的事象〉にしる、“過”の不連続性は作用しない。それは、不変化性の事象は、結果状態 (狭義の結果状態) が生じないからである。つまり、“過”の不連続性は、〈参照時と結果状態 (狭義の結果状態) とが連続しない〉という意味論的な性質なのである。

次に2点目は、“過”の不連続性は事象アスペクトとの関係だけによっては説明できない場合もしばしばあり、認知的要因を総合的に考慮する必要がある、という点である。このような要因は、文脈・対象などさまざまあるが、その中でも、発話の前景・背景が最も重要だと言えよう。すなわち、その結果状態の主体が発話の背景に置かれている場合、“過”の不連続性が作用しない。この場合、その結果状態が参照時においてまだ続いているかどうかにかかわらず、“過”で述べるのであり得るのである。それに対し、その結果状態の主体が発話の前景に置かれている場合は、“過”の不連続性が作用する。この場合、その結果状態が参照時までには終結していなければ、“過”で述べるのであり得ないのである。

つまり、“過”の不連続性が作用するかどうかということを考えるに際して、1) 狭義の結果状態が生じるかどうか、2) その狭義の結果状態の主体が発話の前景にあるかどうか、3) 認知や文脈によってその狭義の結果状態が取り消されていないかどうか、という3つの要因を考える必要があるのである。

では、“過”が不連続性を持つのは、なぜなのだろうか。それは劉綺紋(2004b; 2004c)で述べたように、アスペクト助詞“過”が〈終結点通過〉というアスペクト操作を行うからである。

前述のように、〈終結点通過〉の操作は、何らかの事象と結び付いた場合、その事象がいくつの局面を持つかにかかわらず、その事象における最終局面の終結点を通り過ぎていく、という操作である。そして、狭義の結果状態が生じる場合、その狭義の結果状態がその事象における最終局面となる。そこで、“過”が狭義の結果状態を持つ事象と結び付いた場合、その狭義の結果状態における終結点までも通過してしまう。その結果、その狭義の結果状態が参照時までには終わっていることになり、〈不連続性〉を生じさせるのである。

〔注〕

- 1) 区別できない理由については、劉綺紋(2000; 2004b)で論じた。
- 2) Smith(1997)の「事象アスペクト (situation aspect)」とは、動詞句や文に内在するアスペクトのことである。但し、本稿で言う「事象アスペクト」は、もっぱら動詞句に内在するアスペクトのことを指す。この動詞句に内在するアスペクトは、「語彙アスペクト (lexical aspect)」や「内在アスペクト (inherent aspect)」などとも呼ばれている。
- 3) タクシスとは、テキストにおける複数の事象の相互的な時間関係である。詳しくは、Jakobson(1957)、Maslov(1978)、工藤(1995)などを参照。また、“過”のタクシスの意味については、劉綺紋(2000; 2002; 2004b)で論じた。
- 4) さまざまな言語に関する多くの研究ですでに論じられているように、複数の完結相の連続は、事象間の「継起性」というタクシスの意味を表し、物語を時間軸に沿ってとんとん前へ前へと推し進めていく(Maslov 1978, 春木 1993: 146, 工藤

1995)。それは、完結相が事象や局面を分割せず1つの独立した出来事として捉えるため、複数の完結相が連続して使われた場合、それらの事象が時間軸において互いに重ならず別々に位置づけられるからである(森山 2002: 124)。

- 5) “過”は、動詞・名詞・副詞・量詞・接頭辞・方向補語・助詞など、いくつかの品詞として用いられ、さまざまな意味を表す(『白水社中国語辞典』、『講談社中日辞典(第二版)』、『中日辞典(第二版)』(小学館)などを参照)。その品詞にかかわらず、“過”のプロトタイプの意味は空間領域における通過であり、その他の意味はいずれもこのプロトタイプの意味の下位意味や拡張意味だと筆者は考える。なお、朴鍾漢(1997)は、“過”のプロトタイプの意味を「一定の幅のある空間を横切って通る」と規定している(p.38)。これは、筆者の考え方に近似していると言える。但し、朴鍾漢(1997)では、アスペクト助詞“過₁”“過₂”のうち、“過₂”のほうがプロトタイプの“過”からより遠く離れているとする点が、筆者とは考え方を異にしている。筆者は、むしろ“過₂”のほうがプロトタイプの“過”に近いと考える。なぜなら、“過₂”の操作は終結点通過だからである。それに対し、“過₁”の操作は終結点通過や終結点到達だからである。終結点通過の操作は、空間領域における通過の操作が時間領域へと拡張された結果なのであり、そして終結点到達の操作は、終結点通過の操作からのさらなる拡張なのである。
- 6) Smith(1997)の「視点アスペクト(viewpoint aspect)」とは、文法的なマーカーによって表すアスペクトのことであり、一般に「文法アスペクト(grammar aspect)」と呼ばれている。
- 7) 前者には<変化性の達成型事象>と<変化性の点的事象>とがあり、後者には<不変化性の達成型事象>と<不変化性の点的事象>とがある(劉綺紋 2004b)。
- 8) Tai(1984: 294)では、中国語には達成型事象(Accomplishment)が存在しないとし、中国語の動詞句をState, Activity, Result(すなわちAchievement)という3つのタイプに分類している。そして、達成型事象が存在しないと理由として、例えば、“張三殺了李四兩次, 李四都沒死。”(直訳すると「張三は2回李四を殺したが、李四は死ななかった。」になる)などの中国語の文が言えるように、中国語の達成型事象における目標達成は、文脈によって取り消すことができるからであり、意味論的な目標達成を表さない点で活動型事象(Activity)と同様だからである、としている。

確かに、中国語の達成型事象の目標達成は、意味論的に内在するものではない。しかし、“過”の不連続性などの<結果状態>の問題を考える際、活動型事象と達成型事象とを区別することは非常に重要である。なぜなら、活動型事象には<結果状態>が生じる可能性はないからであり、達成型事象と点的事象のうちの変化性のものだけが<結果状態>が生じる可能性があるからである。従って、筆者は中国語にも

達成型事象が存在し、このタイプを立てる必要があると考える(劉綺紋 2004b)。

- 9) 但し、“殺死”(殺して死なせる)や“槍斃”(銃殺する)と意味的に近い“殺”(殺す)を用いる場合は、“被殺過”は言える。

(i) 趙六被殺過兩次。(直訳すると「?趙六は2回殺されたことがある。」になる。意味は「趙六は2回殺されかけたことがある。」である。)

それは次の理由による。中国語において、結果補語を伴った“殺死”、“槍斃”は「殺して死なせる」「死ぬまで殺す」という目標達成が意味論的に内在する事象であるが、一方、結果補語を伴っていない“殺”は「殺して死なせる」「死ぬまで殺す」までは意味論的に内在しないからである。例文(i)が言える場合は、“殺”が目標達成を表さない場合である。

- 10) この点について、日本語の「結婚する」・「離婚する」と「タコトガアル」との関係にも同様なことが言える。すなわち、「彼女は結婚したことがある」と言う場合、ふつう彼女のその婚姻状態が終わっていることを表す。一方、「彼女は離婚したことがある」と言う場合は、彼女のその離婚後の独身状態が終わっているとは限らない。この点も、“過”と類似性を持つ「タコトガアル」にも不連続性があることを示唆していると推測できよう。

〔参考文献〕

- 春木仁孝 1993. 「時制・アスペクト・モダリティー」(大橋保夫ほか『フランス語とは
 どういう言語か』東京:駿河台出版社, pp.143-168.)
- Jakobson, R. 1957. Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb. In L. R. Waugh and
 M. Halle (eds.), 1984, *Russian and Slavic Grammar*, pp. 41-58. Berlin: Mouton
 Publishers.
- 孔令达 1986. 〈关于动态助词“过₁”和“过₂”〉(《中国语文》第4期, pp.272-276.)
- 工藤真由美 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現
 ——』(東京:ひつじ書房)
- 劉綺紋 2000. 「“-過”形式のパフォーマンス」(『中国研究集刊』27号, pp.14-41.)
- 2002. 「パフォーマンスとしての“-了”と“-過”」(『岐阜経済大学論集』35-3,
 pp.199-234.)
- 2004a. 「“-了”の位置とそのアスペクト機能」(『岐阜経済大学論集』37-3,
 pp.107-137.)
- 2004b. 『中国語のアスペクト体系の再構築に向けて——“-了”・“-著”・“-過”
 を中心に——』(大阪大学博士論文)
- 2004c. 「「限界達成」と「終結点通過」——“-了”と“-過”の基本的なアスペ
 クト操作について——」(『大阪大学言語文化学会第26回大会資料集』, pp.21-

24.)

- 刘月华 1989. 〈动态助词“过₂”“过₁”“了₁”用法比较〉(《汉语语法论集》北京:现代出版社, pp.301-321.)
- 刘月华·潘文娉·故轅 2001. 《实用现代汉语语法(增订本)》(北京:商务印书馆)
- 吕叔湘(主编) 1999. 《现代汉语八百词(增订本)》(北京:商务印书馆)
- Маслов, Ю. С. 1978. К основаниям сопоставительной аспектологии. In 菅野裕臣(訳), 1992. 『動詞アспектについて(II)』(学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 35, pp.31-97.)
- 森山卓郎 1988. 『日本語動詞述語文の研究』(東京:明治書院)
- 2002. 『表現を味わうための日本語文法』(東京:岩波書店)
- 朴鍾漢 1997. 「認知文法による現代中国語多義語の研究」(遠藤雅裕(訳), 『中央大学論集』21号, 2000年5月, pp.21-41.)
- Smith, C. S. 1997. *The Parameter of Aspect*, 2nd ed. Dordrecht: Kluwer.
- Tai, J. H-Y. 1984. Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories. In D. Testen et al. (eds.) 1984. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*, pp.289-296. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell UP.